



あゆみ

青梅市立河辺小学校 学校便り No. 652
令和4年度8・9月号 令和4年8月25日
青梅市立河辺小学校 校長 関谷 望

「一人一人の可能性を信じて」

校長 関谷 望

いよいよ2学期が始まり、学校に子供たちの元気な声が帰ってきました。

今年は3年ぶりの「行動制限のない夏休み」になりました。新型コロナウイルス感染症の新規陽性者数は高止まりの状況で、配慮しながらの夏ではあったかと思いますが、楽しんでリフレッシュしたりできた有意義な夏休みとなったのではないかと思います。

私事ではありますが、母が8月7日に慢性心不全で逝去しました。このような紙面で書くには場違いかもしれませんが、「教育」や「子供の成長」への思いを込めて、少しお話をさせていただきます。

母は享年82歳でしたが、バイタリティーのある人で、つい3年前の79歳まで50年以上に渡り、小さい私立幼稚園の現役の教諭として勤めていました。(母の実家が、幼稚園だったからこそ為せる業ですが)

今から30年近く前、私が教員になってまだ1~2年目のことだったと思います。日々の職務に必死で、なかなかうまくいかないこともある毎日過ごしていた私は、食卓を囲んでいるときに、ふと「先生の仕事って難しい…」というようなことをつぶやいたことがありました。その時、当時で既に幼稚園教諭のキャリアが30年近くあった母が、少し考えた後で、ゆっくりとこう言いました。

「子供は『なまもの』だからねえ」

その時は、何となく分かったような、分からないような感じで、その会話は終わったのですが、後になってから時折、母のこの言葉が思い出されるようになりました。

「どういった意味が込められていたのだろう」と考え、私のその時の立場や状況によって様々な捉え方をしてきました。

「子供は『なまもの』だから、適切な扱いをしなければ傷んでしまう。」と子供の繊細さを言いたかったのかもしれないと考えたり、子供は『なまもの』、つまり『素材』だから「その子の状態は調理する側(大人)の責任だ」とベテラン教師として、駆け出し教師の私に「教師としての責任感」を教えたかったのかもしれないと考えたりしてきました。

「いつか真意を聞いてみよう」と思いながら、結局聞きそびれてしまいましたが、現在の私は、「子供の可能性を信じなさい」という意味だったのではと思っています。

「なまもの」(素材)は同じように見えても全く同じものではありません。同じように、子供にも同じ子は2人としていません。「子供(素材)はそれぞれの良さをもっている。子供の成長に携わる者として、その子の良さを見つけ、引き出し、信じなさい。」という、まだまだ未熟な教師だった私へのエールを込めての一言だったのではと考えることにしています。

2学期は多くの教育活動があり、子供たちが力を発揮し、大きく成長する機会がたくさんある時期です。河辺小学校の教職員・スタッフ一同で心をついに、子供のありのままを捉え、「一歩でも前進していこう」という向上心を引き出しながら、子供一人一人のよさや可能性を伸ばしていけるよう努めてまいります。

感染症や熱中症への対策をしながらの教育活動となり、ご心配やご迷惑をおかけすることもあるかと存じますが、学校と保護者・地域の皆様と「チーム河辺小」として力を合わせ、子供たちの成長を支えていければと思います。どうぞよろしく願いいたします。